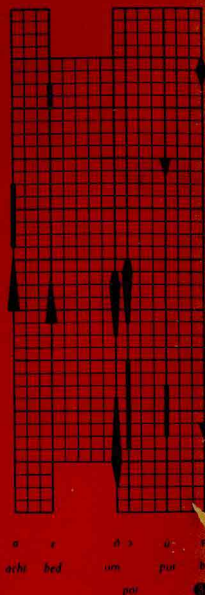


ロの端に上るようになってすでに久しいが、事の当否を正確に知るためには、二〇世紀の詩および批評の実践のなかで、イメージの理論が果たした役割を、個々の事例について評価することが必要となりましょう。



本論理想主義がある。

何びとも確前上座刺でないような

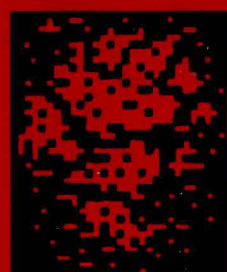
本論理想主義がある。

つまり、内容即形式、物質即精神、

イメージ即觀念といった理想でしよう。

これは觀念の上にのみ

存在するような純粋状態であり……



出展者

川崎寿彦 (前巻)

森常治・出淵博+

岩崎宗治・平井正+

平岡篤頼・豊田昌倫

シン・ボジウム『英米文学』⑧ 学生社

現代批評の展望



ニユークリティシズムにおいては、

対象を作者、読者という関係が、

へ意図に關する誤謬の理論によつて

切りはなされていながら、

作品という記号を媒体としての

作者と読者の対話という新しい関係が

つくり出されています。

また、作者と作品を分離してはいるものの、

やはり、個人の制作という意識が強く、

作品を完全な構造体とみるところまでには

至っていません。

出席者略歴

川崎寿彦 一九二九年生。京都大学文学部英文科卒業。ウイスコンシン大学大学院卒業。現在名古屋大学助教授。主な著書は『ニエツクリティシズム概論』、『分析批評入門』、『ダンの世界』、『マーヴェルの庭』など。

森常治 一九二一年生。早稲田大学文学部及び同大学院博士課程修了。現在早稲田大学教授。主な著訳書は『現代批評の構造(共著)』、『日本幽霊の解放』、『文学形式の哲学(ケネス・パーク)』など。

出淵博 一九三五年生。東京大学教養学部卒業。現在東京工業大学助教授。主な著訳書は『イギリスの批評』一九三〇年以降、『死者の夢』、『煉獄』(W・B・イェイツ)、『反解釈(スーザン・ソントグ)』など。

岩崎宗治 一九二九年生。愛知学芸大学在学。卒業。ケンブリッジ大学大学スピア図書館研究員を経、現在名古屋大学助教授。主な著訳書は『英米文学の意識』、『暖味の七つの型』など。

平井正 一九二九年生。東京大学文学部独文専攻卒業。現在東京工業大学助教授。ドイツ・ロマン派文芸理論専攻。主な著訳書は『文学の基礎理論』(共著)、『夜警』(ボナヴェントウラ)など。

平岡篤頼 一九二九年生。早稲田大学文学部英文科、同大学院博士課程修了。主な著訳書は、『変容と試行』、『迷路の小説』、『フランドルへの道』(クロード・シモン)、『新しい小説のために』(ロブルグリエ)など。

豊田昌倫 一九三八年生。京都大学文学部博士課程修了。現在同大学助教授。主な著訳書に『Edmund Coote: The English Schoolmaster』(共編)、『名詞構文の形態と機能』(『英文学研究』四七一)

司会者の諒解により検印を省略します

4911

シンポジウム英米文学 8 現代批評の展望

昭和49年11月15日 初版印刷
昭和49年11月20日 初版発行

司会者 川崎 寿彦
発行者 鶴岡 陞 巳

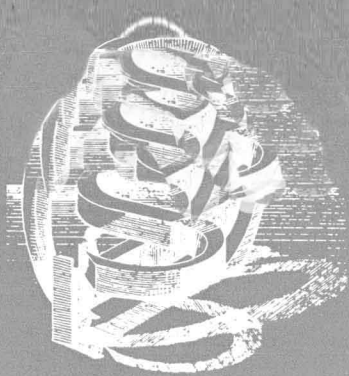
名古屋市中区藤巻町2-2
東京都千代田区九段南2-2-4

発行所 株式会社 学生社

東京都千代田区九段南2-2-4
電話 (263) 2611(代表)
替・東京18870番
編集担当 土屋晃三

装幀 杉浦康平・鈴木一誌

『シンポジウム』英米文学⑧



現代批評の展望

学生社

出席者

川崎寿彦〈司会〉

森常治

出淵博

岩崎宗治〈第1、2章ゲスト〉

平井正〈補遺ゲスト〉

平岡篤頼〈第4章ゲスト〉

豊田昌倫〈第3、4章ゲスト〉

目

次

第一章 開かれたニュークリティシズム

——とくにイメージを中心に——

△報告▽ 川崎 寿彦

ニュークリティシズムを掘りおこす.....	三
ロマン主義の行くえは？.....	一五
概念史派はどうなるか？.....	一六
イメージの問題.....	一八
イメージとカトリシズム.....	二
△単一イメージ▽.....	二三
イメージのない詩.....	二六
イメージと構造.....	三
シェイクスピア批評とイメージ研究.....	三
ニュークリティックのイメージ理論.....	三七
イメージの非時間性.....	三九
フロイトとイメージ.....	四一
イメージ思考とロマン派.....	四四
最後のロマン派？.....	四七
ダンとボードレール.....	四九

イメージの種類	五
イメージにおける通時と共時	五
イメージから構造へ	五

第二章 先祖がえりの批評

—— 象徴・神話・祖型など ——

報告 川崎 寿彦

リチャーズの理論と象徴的言語観	三
エリオットと先祖がえり	六
象徴の詩学の誕生	七
小説批評とニュークリティシズム	七
象徴と批評の方法	七
アメリカ小説と批評の傾向	七
小説と不条理	七
非合理性の優位	八
身代わりヤギ	八
シェイクスピア劇と祭祀	六
△身代わりヤギ△の二面性	七
非合理性の合理的説明	九

ノースロップ・フライの批評体系……………	三
フライにおける作品の位置……………	六
フライの評価……………	九
フライと夢……………	一〇
フライにおける普遍と個別……………	一五
フライのメリット、デメリット……………	一七
批評における体系と実践……………	一九

第三章 共時性の理念

——構造主義的批評と言語学的批評——

△報告▽ 森 常 治

イメージから構造へ……………	二四
構造主義への移行は？……………	二九
内容と形式、そして△構造▽……………	三二
シカゴ派對ニュークリティシズム……………	三三
言語学における△構造▽の意識……………	三四
フライと△構造▽……………	三七
△伝統▽と歴史・反歴史……………	三九
言語学と文学批評……………	四〇

ロシア・フォルマリズム	一三
フォルマリズムと音韻論	二六
ローマン・ヤコブソンにおける言語学と批評	三九
受け手の詩学	四三
ランサムにおける「構造」の概念	四四
ランサムの新しさ	四七
文化人類学と構造主義	四九
表層構造と深層構造	五〇
文学における表層構造と深層構造	五二
構造主義と「メッセージ」	五九
マクルーハンの「メッセージ論」	六三
バークの理論	六五
バークの体系と臨接科学	七二
バークとニュー・レトリック	七四
バークと深層構造	七六
「構造」から意味へ	七八

第四章 国際的なひろがり

△報告▽ 出淵 博

国際的に見た△新しい批評▽	一八七
ヌーヴェル・クリティックの系譜	一九〇
ニュークリティシズムとヌーヴェル・クリティック	一九四
新しい△歴史▽の可能性	一九九
△同化の批評▽	二〇三
意図と構造	二〇四
作家と批評家	二〇五
技術批評の実体	二〇八
新しい文学と新しい批評	二一一
批評と主体性	二一六
ことばの自律性	二二〇
バシュラールとイメージ	二二四
バシュラールとフライ	二二八
ことばとイメージと実体	二三三
言語学と批評の未来	二三八
フィロロジの古さと新しさ	二四〇

文法性と文体論……………二四三

柳田・折口学のこと……………二四九

補遺 フォルマリズムと構造主義

新しい批評とロシア・フォルマリズム……………二五三

ムカジヨフスキーの位置……………二五四

音韻論と社会的関心……………二五七

マルキシズム影響下での平行関係……………二五九

フランス構造主義との関係……………二六二

前景化・異化作用・自動化……………二六四

ブラーハ学派の果す役割……………二六七

フランスとブラーハ——構造の差異……………二六九

マルキシズムのアンチテーゼ……………二七三

情報理論への変質……………二七五

文学批評の課題……………二七七

あとがき……………二八〇

年表・文献一覧・事項索引・人名索引

第一章 開かれたニュークリティシズム

——とくにイメージを中心に——

ニュークリティシズムを自己完結的な批評運動として考察することには、それなりの意味があるでしょう。しかしあの批評運動が終熄して約二〇年たったいま、それをもうすこし現代文芸思潮の本流に棹さしたものとして把えなおすことは、さらにいっそう意味あることと思われます。つまりニュークリティシズムを「開かれた構造」[○]として理解するわけです。

こんにちから回顧して、ニュークリティシズムの理論的基盤であり、実践的武器としてもとりわけて強力であったのは、「イメージ」[○]の理論であったと考えられます。そしてこの理論の考察は、ニュークリティシズムの開かれた特質を、すぐれて開示するであります。

まずニュークリティシズムは、審美的構造素として理解された「イメージ」[○]をとおして、後ろ（すなわち時代的にさかのぼる方向に）向かって開かれていました。ランサム[○]の詩論はエリオットの「感性の融合」[○]論をへて、パウンドやヒュームの「イメージ」[○]理論と

直結し、そこから十七世紀の形而上詩につながっていますし、ブルックスの「機能的隠喩」[○]の詩論はフランス象徴派にさかのぼり、そこからダンやマーヴェルに橋をかけ渡すという離れ技を演じています。

いや、じつはこれが離れ技に似て離れ技でないかもしれぬという事実[○]に、現代批評の風土的特質があるのでしょう。なぜなら二〇世紀前半の詩人・批評家たちによって「再発見」されたダンは、意外に深く象徴派的・ロマン派的な色合いに染め上げられた一面をもっていたわけですし、エリオットの「感性の融合」[○]理論は、コウルリッジのイメージ理論の延長であったといえるかもしれないのですから。

ニュークリティシズムのロマン主義性が口の端に上るようになってすでに久しいけれど、事の当否を正確に知るためには、二〇世紀の詩および批評の実践のなかで、「イメージ」[○]理論が果たした役割を、個々の実例について評価することが必要となりましょ

△報告▽ 川崎 寿彦

う。イエイツからブレイクにさかのぼる流れもその一つでしょうし、ランサムとパウンドが唱えた「単一イメージ」の詩の理念はとくに注目すると思われまふ。さらには、シェイクスピア批評でよく知られた、イメージ群の機能の考察による作品批評の方法も、その特質を再検討するべきだと考えられます。

この種の批評は、ときにその実践者によって、根本において「空間的」な原理に立つものとして自覚されていますが、この事実はイメージの本質を理解するために重要なことでありましよう。パウンドは気づいていたわけですが、イメージとはもともと非・時間的なものでしょう。このことは二〇世紀文学の一面に見られる非・説話的、非・論述的な特質と関連をもつと思われまふし、また、その批評の形式主義的な本質とつながってゆくはずであります。これは第三章で徹底して検討されるでしょう。「意味するのではなく、存在する」種類の文学を作りだすのは、イメージの機能の一つだったと思われるからです。

イメージが論理の肩がわりをして非・論述的な文学が完成されるという、二〇世紀批評の期待は、おそらく深くロマン主義的なものだったでしょう。そしてそれはさらに深く、象徴主義的・有機体論的・魔術の世界観にまで「先祖がえり」していくのかも知れません。

カーモドの『ロマンティック・イメージ』は、二〇世紀のイメ

ージ論的批評の象徴派的、ロマン主義的特性を指摘した名著ですが、それを支える史観は、やがてこのロマン主義的なイメージ詩論の時代が終ろうとしているのだという史観です。われわれはこの史観の可否を検討すべきでしょう。なぜならひょっとしたら現代批評は（すくなくともその一面では）いっそう深いロマン主義にのめりこみつつあるのかもしれないからです。これをいいかえればニュークリティシズムのイメージの詩論は、前（すなわち時代的に下つて来る方向）に向かつてむしろじゅうぶんに開かれているということになりましよう。

たとえば思い出すのは、イメージをもって「イド」に近づく手段とみなしたフロイトの立場です。二〇世紀後半の批評は「イメージ」と「シンボル」をいっそう近づけました。そして深層心理学や、文化人類学や、行動科学などの分野での新しい関心とからめて、文学作品のなかのイメージは、いよいよなまなましい関心の対象になっています。かつて二〇世紀前半には、「イメージ」は感覚と理性を調和・融合させる媒体でした。それに対し、今日では、それは非合理的なものの優位の証しとして利用されつつあるのかもしれない。それは想像力の復権運動の延長であり、新しいロマン主義運動の一つの焦点なのでしょう。

ニュークリティシズムを掘りおこす

川崎 このレポートの初めに書いた、「ニュークリティシズムを自己完結的な批評運動として考察する傾向があった」ということですが、これは実を申せば、私自身がそういうことをかつてはいつていたのです。それに対する一つの反省がいまの私にはあるわけです。

かつて私は、ニュークリティシズムというのは一つの期待された機能を終えてしまった、だからこんどは、まったく新しい批評体系が誕生すべきだという、フランク・カーモドなどの予言⁽¹⁾をほぼそのまま信じておりましたので、死んでしまったものは早く葬ったほうがいいという意味で、ニュークリティシズムを埋葬しようとしていた傾向があったようです。

ところが、六〇年代を終わってみても、新しい批評体系は、私が期待したような、あるいはカーモドが期待していたらしいような形では、生まれてきていない。そうすると、私なんかはニュークリティシズムを早く埋葬し過ぎたんじゃないか。もう一回掘り起こしてじっくり考えなくちゃいけないんじゃないかという気が、しきりにしているわけなんです。そうなるとニュークリティシズムを一つの完結したシステムとしてとらえるのは、おそらく間違いだである。やっぱり後に向かっても、前に向かっても、開かれたものとしてとらえなおすべきであらうと考えるようになりましてので、「開かれたニュークリティシズム」というテーマを設けました。

その点、どうぞ自由に皆さんのご意見をお出しただきたいと思ひます。

森 私はカーモドについてあまりくわしく知らないですけれども、「新しい詩論は秩序である。秩序を敬う目覚めた詩論になるだろう」といっています、秩序の観念というのはカーモド

(1) Frank Kermode, *Romantic Image* (1957)

自身はつきり書いていませんね。やはり、構造主義につながる秩序でも考えていたのでしょうか。

川崎 そうでなくて、これはあとで出てくるでしょうけれども、ドナルド・デイヴィー⁽²⁾なんかの予言と同じような、つまり理性と論述の上に立ったクラシカルな秩序なんでしょう。彼はロマン主義がずっとニュークリティシズムまで流れ込んできていると考える。そしてそれが終わらなくちゃいけないんだということです。そのあとに彼が期待していたのは、理性と秩序に基盤をもったクラシシズムだったんじゃないかと思うんです。

森 むしろある意味ではうしろ向きと解釈していいんですね。

川崎 非常にそうですね。講壇的だといましようか、アカデミシヤンの考え方でもあるのでしょう。アポロ的な新しい秩序が、古典主義的な文学として確立されるはずだ、延び延びになっていたけれども、もうすぐ確立されるんだという期待、未来展望があつて、ものをいっていると思うんですがね。その後のカーモドはかつての予言が実現しなかったことを自覚して、発言を自己修正しているようですが……。

岩崎 ある意味では、アイヴァ・ウィンターズ⁽³⁾みたいな理性重視、オブスキュアランティズム(反啓蒙主義) 反対の批評傾向が強まることを予想していたということでしょうか。

川崎 そうなんです。だから、カーモドはウィンターズを高く評価していますね。彼はロマン主義、象徴主義の流れに出てきた英米批評の周縁児である、というような表現を使っています。つまり、外側に一人立っているということですね。そういうところにも、彼の期待が顔をのぞかせているのでしょう。

森 ウィンターズのいき方は、結局、主流にはなっていませんね。

岩崎 さっき川崎さんがおっしゃったように、新しい批評が生まれていないということは、主

(2) Donald Davie, *Articles of Faith* (1955)

(3) Ivor Winters, *In Defense of Reason* (1937)

ウィンターズ (Ivor

Winters) 一九〇〇—一九六六。

アメリカ詩人、批評家。詩集

『不動の風』 *The Immobile*

Wind (1921) 批評『原始主

義と頹廢』 *Primitivism and*

Decadence (1937) など。

流がどのへんにあるか、まだ見当がつかないという意味なのか……。

ロマン主義の行くえは？

川崎 新しい方向に批評の流れが変わるだろうという予言があったし、私自身もそうだろうと思っていたら、一向そうではなくて、実は、ある面ではさらに象徴主義的な、あるいはロマン主義的な方向に、のめりこんでいっている傾向すらあるんじゃないか、ということなんです。

どうなんですか、新しい方向に批評は変わりつつあるのでしょうか。

出淵 いまの川崎さんのご発言——ロマン派的・象徴派的なものがまだ残っている、あるいはかえってそういうもののにのめりこみつつあって、新しい傾向は出ていない、というご意見——は、批評の傾向よりも、文学作品自体についておっしゃったことなのではないでしょうか。

川崎 それもあるし、文化自体、思想自体が、そちらのほうに相当な速度でまだまだのめりこみつつある。そして、それをたいへんおっぴらに、むしろ積極的にする向きもあるわけでしょう？ フロイト、ニーチェというところからきて、ずっとヘルベルト・マルクーゼまでいく流れだっけそうだと思いますよ。だから、批評だけを切離して考えてもそうだけれども、実は出淵さんがいまおっしゃったように、文学自体の問題であるし、さらには、現代文明の一つの傾向ではないかと思えますね。相当な加速度がついてそちらへいっている感じがする。ただし、その逆のヴェクトルもあるはずなんで、——そちらはどうなんですか？ 思想にしろ、文化にしろ、文学そのものにしろ、あるいはその中の批評にしろ、逆だって当然……。